

公害怪獣とエコクリティシズム
—ポスト工業化社会における核・ジャンク・廃墟の想像力
中垣 恒太郎（常磐大学）

序

戦後復興から高度経済成長を遂げる過程で、日本の大衆文化は、工業化がもたらす自然環境破壊の爪痕を様々な形で表現してきた。1960年代以降の急激な高度経済成長は、少年向けの大衆文化の成熟期にも相当し、漫画雑誌、空想特撮 TV 番組などが大変な人気を博した時代でもあった。

すでに社会学の見地から多くの学術的成果も示されているように、たとえば、『ウルトラマン』シリーズ（1966～75）に目を向けるならば、差別や冷戦構造下の日米関係の暗喩、そして環境問題に対する社会派的関心を読み込むことが可能である。工業化と同時に現れた光化学スモッグ、ヘドロ、水質汚濁、ゴミ問題などの現象が「怪獣」の形をとって現れ、人間を襲う。現在、海外の文化研究においても注目の高い『ゴジラ』（1954）もまた、そもそも「核実験」による産物であり、『ゴジラ VS ヘドラ』（1971）では、製紙業で盛んな静岡県富士市田子浦港で問題となった、ヘドロによる汚染を背景としている。また、TV シリーズ『宇宙猿人ゴリ』（後に『スペクトルマン』と改称、1971～72）では、美しい地球に魅せられた宇宙猿人ゴリが地球征服をもくろむ。「スペクトルマン」に変身する力を持つ主人公は、政府機関である公害調査局第8分室（通称、「公害Gメン」）に属し、公害怪獣ヘドロンやダストマンらから地球を守るべく立ち上がる。

本発表では、1960年代から70年代にかけて、日本の大衆文化が高度経済成長の背後で産み出した「公害」と「環境問題」の足跡を、エコクリティシズムの見地から再検討してみたい。『水俣——患者さんとその世界』（1971）をはじめとする公害ルポルタージュにより、日本のドキュメンタリー表現の地平を広げた映像作家、土本典昭らの仕事をも参照しつつ、フィクションおよびノン・フィクションの領域を超えて、日本の高度経済成長が見た核・ジャンク・廃墟の想像力の源泉に迫りたい。

1・高度経済成長の夢と悪夢

1964年の東京オリンピック、1970年の大阪万博の成功に代表されるように、1960年代、日本は工業をはじめとする技術の発達と共に、経済繁栄を迎え、文化面でも著しい成熟を示した。科学技術の急激な進展は当時、流行した未来予想のヴィジョンに色濃く影響を及ぼし、文明の発達を遂げた未来社会においてはあらゆる問題が科学の力で解決されるものと期待されていた。この時代は少年少女向けの大衆娯楽文化の成熟期にも相当し、雑誌や新しい文化の担い手となるテレビを通して、子供たちに文明化した未来社会のヴィジョンを植えた。少年向けの TV 番組では「空想科学もの」のジャンルが人気を集め、中でも怪獣および正義の味方が活躍する「特殊撮影」は当時の科学技術を駆使した撮影技術のなせるわざであり、科学時代を象徴する存在であった。

旧来の景観を取り壊し、新たに高層ビルを建築する動きは来るべき未来への助走とみなされ、大いに奨励された。エネルギー源が石炭から石油に代わり、3種の神器と称された「テレビ・洗濯機・冷蔵庫」は人々のライフスタイルを完全に変革した。「所得倍增計画」

が経済政策として打ち出され、「大きいことはよいことだ」という言葉が流行語となり、1969年には「エコノミック・アニマル」という言葉もすでに用いられているほど、過剰な労働時間が戦後の復興期を支えた。しかしながら、「東洋の奇跡」とまで言われた、終戦直後からの急激かつ連続した経済成長は、公害の発生、大量生産・大量消費時代による必然的な結果としてのゴミ問題などをもたらし、まず環境問題の形でそのほころびが現れるに至った。

2・「怪獣」がめざめる夜——『宇宙猿人ゴリ』と『ゴジラ VS ヘドラ』

少年向けの大衆娯楽は、明日の日本を背負う子供たちのために未来に対するヴィジョンをくりかえし提供し、来るべき科学の時代を高らかに謳いあげていた。同時に、高度経済成長の背後で起こりつつあった異変に対しても、逸早く反応を示している。

1970年5月、東京のある高校のグラウンドで運動中の生徒43名が次々に倒れるというニュースが報道された。日本において光化学スモッグが初めて観測された事例である。国家と企業の責任を問う、水俣病などの公害裁判も進展する中、少年向け大衆娯楽には環境問題の影が色濃く影響を及ぼすようになる。1971年にスタートしたTV番組『宇宙猿人ゴリ』は、「美しい地球」を手に入れようともくろむ、悪の天才科学者「宇宙猿人ゴリ」と、地球を守る使命を担った遊星ネビュラ71からの使者、スペクトルマンとの攻防を描いた物語である。他局で人気を誇っていた『ウルトラマン』シリーズに対抗して製作された特殊撮影ものであり、「怪獣と戦うヒーロー」のジャンルを踏襲している。

『ウルトラマン』シリーズもまた、子供向けの体裁をとりながらも、差別の問題など社会派のテーマを扱うことが多いことで知られているが、『宇宙猿人ゴリ』では政府機関である公害調査局第8分室（通称・公害Gメン）を舞台に、最新の社会問題である公害と環境を軸に据えている点に最大の特色がある。宇宙猿人ゴリは公害怪獣ヘドロン、巨大怪獣ダストマンなどを送り出し、地球征服をもくろむ。当時、問題視されはじめていた、「交通渋滞・排気ガス・交通事故」の温床としての自家用車ブームは、交通事故怪獣クルマニコラスの形で現れている。そもそも天才科学者である宇宙猿人ゴリは、文明の発達の代わりに自然を失ってしまった故郷を捨て、緑の多い地球の美しさを愛するあまりに地球の征服を企てるという設定がほどこされている。ゴリは人間が生み出した環境汚染を利用して地球人に攻撃をしかける。工業化社会の問題点に正面から切り込んだ『宇宙猿人ゴリ』は、単純な勧善懲悪ものとは一線を画しており、宇宙からきた正義の味方、スペクトルマンも、公害Gメンも常に悩み続けている。怪獣を倒せばすべてが解決するわけではなく、環境汚染の問題は残存し、宇宙人ではなく、地球人がこの問題と直接、向きあわなければならない。

『スペクトルマン』は、緊急に企画が決まったという事情からも決して技術面で完成度の高い作品とは言えないが、環境問題に対する同時代のきわめて早い反応を示した作品の一つであり、1978年にはアメリカで放映された（英語タイトルは *Spectreman*、ヨーロッパ・中南米でも放映された）ことから一部では高い評価を受け、アメリカの子供たちにはじめて公害の恐怖を教えた作品という呼び声もある。

また、映画の世界でも『ゴジラ』シリーズの第11作『ゴジラ対ヘドラ』に登場する、怪獣ヘドラはシリーズ最強の怪獣とも言われ、ヘドラの吐き出すヘドロを浴びたゴジラは

顔面が焼け爛れ、片腕の骨がはみ出してしまふ。その姿は、子供の観客に強烈な衝撃を与えた。ヘドラが通った後には硫酸が蔓延し、金属はたちまち錆びてしまひ、人間は骨と化してしまふ。工場の廃棄やヘドロを吸い込んで巨大化し、汚水を排泄しながら海を泳ぎ、硫酸を撒き散らしながら空を飛びまわる、ヘドラの姿はまさに公害のメタファーそのものであった。最終的にはヘドラの活動を活性化させる動力源となる、ヘドロを乾燥させることにより、ヘドラは元の泥の塊に戻っていく。しかし、ヘドラは根絶されたわけではない。現実の世界においてもヘドラの恐怖が再び沸き起こる可能性を示唆することで、環境問題への取り組みの重要性を観客の潜在意識に訴えている。

3・ドキュメンタリー——水俣問題のクロニクル

「東アジアからの提言」のテーマの下、日本文化がいかに公害、環境問題を扱ってきたか、その歴史の変遷を展望する際に、環境汚染に対する恐怖が子供向け大衆文化の中で現れていたことについて前項で触れた。続いて、日本のドキュメンタリー表現がこの問題をどのように取り上げてきたのかを概観しておきたい。

1971年に発表された、土本典昭『水俣——患者さんとその世界』（167分）もまた、『宇宙猿人ゴリ』、『ゴジラ VS ヘドラ』とまさに同時代の産物である。すでに土本は1965年に日本テレビにて25分の番組『水俣の子は生きている』を手がけており、以後、数十年にわたり、「水俣クロニクル」とでも称すべき、17本もの関連作品を制作し続けてきた。現在、ドキュメンタリー映画への注目が高まりを示している中で、2007年にはドキュメンタリー作家としての土本の遍歴自体を素材にしたメタ・ドキュメンタリー『映画は生きものの記録である』（藤原敏史監督）も公開され、土本の仕事に対する再評価がなされてきている。土本が記録に残した映像を参照することにより、高度経済成長期の日本が工業化を進めていく背後で何が起こっていたのかを改めて推し量ることができるだろう。『水俣——患者さんとその世界』は、有機水銀を垂れ流してきた企業（チッソ）と、それを見送ってきた行政を相手に1969年に裁判を起こした水俣の29世帯を中心に、公害訴訟の様子、「公害の町」の人々の生活を描いている。水俣問題のクロニクルとなる、土本典昭のドキュメンタリー作品を参照することにより、工業化社会の繁栄の背後で蔑ろにされてきた問題の大きさに観客は圧倒させられるはずだ。同時代に登場することになる「怪獣」のうごめきをここに感じ取ることができるのではないか。

まとめ

ゴジラそのものが核兵器の恐怖を投影する形で登場した怪獣であったように、そしてさらに遡り、メアリー・シェリー(Mary Shelley)の『フランケンシュタイン』(*Frankenstein, or The Modern Prometheus*, 1818)もまた、科学時代の行く末を暗示するかのようなマッド・サイエンティストの原型を産み出したことを想起しても、人類が捉えきれないでいる潜在的な不安が怪物の形で現れる。1970年代初頭に登場した『宇宙猿人ゴリ』における公害怪獣や『ゴジラ VS ヘドラ』のヘドラは、液状であることから、その実態はきわめて捉えがたく、物語の中で怪獣が退治された後も不気味な余韻を残している。高度経済成長の反映の背後で着実に進行していた環境汚染は、怪獣として具現化され、次世代を担う子供たちに対し、未来への警告を発していたのである。